

テキスト 出エジプト記 14章

### 〈背景と文脈〉

贖いは救済史の大きなテーマのひとつであるが、出エジプト記にはそれに関する出来事が記されている。

主はご自身の民をエジプト人の奴隷の身分から贖うためにモーセを召された。これはアブラハムになされた約束の成就であった（創世記15:13-14）。主は十の災いをもってエジプト人に審判をくだされたが、最後の災いとして、エジプト人のすべての初子を撃たれた。それによって、王ファラオはイスラエル人がエジプトを去ることを許可した（12:29-32）。<sup>すきこし</sup>過越（12章）の出来事はイエス・キリストによる贖いを指し示すものとして重要な意味を持つ。それに続く葦の海の奇跡（14章）は、イスラエルの民によって記憶され続けるべき歴史的出来事として、詩編や預言書などで、繰り返し言及されている。これにより、イスラエルの民はエジプト人の支配から完全に解放されたのである。

### 〈ファラオの心変わりと追跡〉（14:1-12）

イスラエルの人々はモーセに導かれてラメセスから出発した。このとき壮年の男子だけで60万人いた（12:37）。主は、昼は雲の柱、夜は火の柱をもって彼らを導かれた（13:21）。主の大きい御手に導かれてエジプトを出発した彼らに待ち受けていたのは、大きな試練だった。

主は指導者モーセに、「バアル・ツェホンの前に、それに面して、海辺に宿営する」（2節）よう民に命じなさい、と言われた（詳細な場所に関してはわかっていない）。それには主の目的があった。主はエジプト人に対する最後の決定的な審判を下そうとされていたのである。

イスラエルの民がエジプトを去るのを許可したファラオは、彼らの逃亡について聞くと、心変わりをした。それはイスラエル人がエジプト人の奴隷として有益な存在だったからである。ファラオは自ら軍勢を率い、イスラエル人のあとを追った。

強大な軍事力をもって、再び彼らを奴隷としようとした。しかしこのことが主のご計画のなかにあったことは、次から明らかである。「わたしはファラオの心をかたくなにし、彼らの後を追わせる。しかし、わたしはファラオとその全軍を破って栄光を現すので、エジプト人は、わたしが主であることを知る」（4節）。

ファラオの軍勢がイスラエル人に追いついたとき、彼らは非常に恐れた。前は葦の海、後ろはエジプト軍という絶体絶命の状況のなかで、イスラエル人は、主がエジプトの地で彼らのためになされた数々の不思議なみわざを忘れ、モーセを責めた（11-12）。

### 〈イスラエルの民のために戦われた主〉（14:13-31）

そのとき、モーセは民に答えた。「恐れてはならない。落ち着いて、今日、あなたたちのために行われる主の救いを見なさい。……主があなたたちのために戦われる。あなたがたは静かにしていなさい」（13-14）。

主ご自身が彼らのために戦われるので、彼らがなすべきことは、主に信頼することであった。前は海、後ろはエジプト人という絶体絶命の状況でも、全能の神はご自身の方法を持っておられる。モーセが杖を持ち、その手を海に向かって差し伸べたとき、奇跡は起きた。主は激しい東風をもって海を押し返されたので、水は分かれ、海は乾いた地が変わった。この出来事を単なる自然現象と考える学者もいるが、海の水を押し返すだけの強烈な風が吹いている中をイスラエル人が渡ることは不可能である。たとえ自然現象を用いられたとしても、それを支配されているのは主ご自身である。エジプト人が後を追って海のなかに入ったとき、海の水は元に戻り、ファラオの全軍は全滅した。

主はイスラエルの民のために自ら戦われ、栄光を現された。主は、主権者としてご自身の民のために戦ってくださる生ける全能の神である。

（後藤公子）

テキスト

出エジプト記 14章

参照カテキズム

子どもカテキズム 問11, 13, 41, 42

**〔単元のねらい〕**

この出来事とおして、主なる神は、イスラエルの民に、勝利の神としてご自身をお示しになった。そして、イスラエルの民からの信頼を勝ち取ろうとされたのである。ここには、神をなかなか信頼することのできないわたしたち人間に対する憐れみ深い取り扱ひがある。参照カテキズムには、十戒の序文の問答を挙げた。過越のみわざも不可欠であるが、この出来事とおして、主なる神はイスラエルの民をご自分のものとされたのである。

**「神さまの勝利を見よ」**

前回、イスラエルの民がエジプトから脱出したところまで学びました。エジプトの全地に悲しみと苦しみの叫び声が起こり、「イスラエルの人たちがこのままエジプトにいと、かえって災いばかり起きて、エジプトは滅びてしまう」と思われるようになって、ファラオは、イスラエルの民がエジプトを去ることを許しました。イスラエルの民は、追いつ立てられるようにして、エジプトから脱出しました。

さて、そのイスラエルの民は、エジプトから脱出して、アブラハム、ヤコブ、ヨセフのふるさどであるカナンを目指します。けれども、主なる神さまは、イスラエルの民をまっすぐにカナンへと導かれるのではありませんでした。シナイ半島の荒れ野の方向に向かうのかと思えば、地中海近くの湖や沼地が広がるところに導かれて、イスラエルの人たちは、自分たちはいったいどこに向かうのだろうかと思つたかもしれません。先祖の住んでいた場所、わたしたちのふるさどであるカナンを目指すのではないのか、けれども、右に行ったり左に行ったり、いったいこの先どこへ向かうのかと思つたでしょう。イスラエルの人たちは、エジプトで奴隷として生きてきましたから、エジプトの外のことはまるで分かりません。モーセはエジプトを離れてミディアンの荒れ野で生活したこともあったので、モーセなら荒れ野の道が分かるはずだと思つていたのですが、本当に

モーセに従って行って大丈夫だろうか。そんなふうにも思ひ始めたかもしれません。

実のところ、イスラエルの民を導いていたのは、モーセではなく、主なる神さまでした。モーセは、主なる神さまが命じられることに従って、イスラエルの民を導いていました。そのことを教えるために、神さまは、昼は雲の柱、夜には火の柱で照らし出して、イスラエルの民を導かれました。そして、神さまは、ご自身の力強い御力を示して、大きな出来事を行つていただきました。

イスラエルの民が荒れ野に向かう道を右に左にしていた頃、エジプトのファラオは、考えを変えていました。「奴隷としてとても役に立っていたイスラエル人を追いつしてしまうとは、いったい何と愚かなことをしてしまったのだろう」。そのとき、イスラエル人が、湖や沼地の広がる葦の海のほうへと向かっているとの連絡が入りました。「道に迷っているのだな」。そう思つたファラオは、エジプトの全軍に号令をかけて、出発させることにしました。「イスラエル人を追いつかて、エジプトに連れ戻せ」。ファラオ自身も、馬にひかせた戦車に乗って、出発しました。

それから数時間して、海に面した場所に宿営していたイスラエルの人たちは、突然、妙な音に気がつきました。遠くから地響きのような音がして、しかも近づいてくるのです。「いったいこの地響

きは何だろう」と思っていると、遠くにエジプトの軍勢が姿を現しました。「たいへんだ！ エジプトの軍隊が追いかけてきたぞ」。イスラエルの宿営は、大騒ぎになりました。

何ということでしょう。エジプトの軍隊が迫って来るというのに、イスラエルの人たちの前には海が広がっています。前は海、後ろはエジプトの軍隊に囲まれて、もはや逃げ場所がありません。イスラエルの人たちはモーセにくっかかりました。「わたしたちを連れ出したのは、この荒れ野で死なせるためですか。こんなかたちで死ぬのならば、エジプトで奴隷のままいたほうがよかったですではないですか」。

けれども、モーセは言いました。「恐れてはならない。今日、あなたたちのために行われる主の救いを見なさい」。「主があなたたちのために戦われる。あなたたちは静かにしていなさい」。モーセは、恐れたり不安になったりする必要はないこと、イスラエルの神さまである主なる神さまがイスラエルのために戦ってくださることを教えて、「静かにしていなさい」と命じました。

主なる神さまは、イスラエルのために、どのように戦ってくださるのでしょうか。そうこうしている間にも、エジプトの軍隊はどんどん迫ってきます。と、突然、イスラエルの民に先立って導いていた雲の柱が、イスラエルの人びととエジプトの軍隊の間をさえぎるかのように、イスラエルの人びとの後ろに動いていきました。真っ黒な黒雲が立ちこめ、ちょうど夜になり、あたりは暗闇に包まれ、稲光も光り始めました。エジプトの軍隊は、動くことができなくされてしまいました。

もう一方で、主なる神に命じられて、モーセは海に向かって手を差し伸べます。すると、主なる神さまが激しい風を送って、海の水が押し返されました。一晩中、強い風が吹き続けて、とうとう海の中に乾いた地面が見えるようになりました。海の水が右と左に壁のようになって分かれたのです。「それっ！ 今だ！」と言って、イスラエルの人たちはみな、海にできた乾いた道を通して、向

こう岸に向かいました。それに気づいて、エジプトの軍隊も、海の中の乾いた道を通して追いかけてようとします。けれども、火の柱と雲の柱がエジプト人の目をくらまして、思うように進めません。重たい戦車も、車輪がぬかるみにはまって外れてしまい、なかなか前に進めません。ついに、イスラエルの人たちがすべて向こう岸に渡り終わりました。主なる神さまは、再びモーセに、海に向かって手を差し伸べるよう命じます。モーセが再び海に向かって手を差し伸べると、右と左に分かれて壁のようになっていた水が元の場所に流れ返りました。エジプト軍は、海の水から逃げようとしたましたが、一人残らず、水に飲み込まれてしまいました。夜が明ける頃には、海はすっかり元のよう

に穏やかな様子になっていました。こうして、主なる神さまは、イスラエルの人たちに、ご自身の大いなるみわざを見せてくださいました。エジプトのファラオや、エジプトの神々に勝利する、力強い神さまであることをお示しくださいました。イスラエルの民は、これからいったいどなたに導かれて、荒れ野を旅するのか。それは、この力強い神さまに導かれて旅をするのです。この神さまに信頼して、おまかせして、ついて行けばよいのです。イスラエルの人たちは、この出来事をおして神さまの力強さを知り、神さまに信頼して従うことへと導かれました。

この神さまが、十字架と復活のイエスさまによって、わたしたちの神さまでもあられます。エジプトに勝利された神さまは、イエスさまの十字架と復活のみわざによって、罪と死に打ち勝つ大きな力をお示しくださいました。神さまはご自身の勝利を示して、わたしたちの神となってくださいました。そして、今も、わたしたちに約束してくださっています。「主があなたたちのために戦われる。あなたたちは静かにしていなさい」。わたしたちも、この大いなる神さまに信頼して、与えられている人生の旅路を神さまに導かれて歩んでいきましょう。(望月 信)

---

[今週の暗唱聖句] 出エジプト記 14章 14節

主があなたたちのために戦われる。あなたたちは静かにしていなさい。

---

**〈ねらい〉**

前は海、後ろはエジプト軍、という絶体絶命のピンチの中で、主がご自分の民のために先頭に立って戦ってくださるお方であること、海をも分けて民を導かれる力のある、全能の神であることを覚える。

**〈展開例〉**

神さまは、イスラエルの人々をエジプトから救出するために、十の災いを起こされました。最後の災いとして、エジプト人のすべての初子が撃たれたとき、災いがイスラエルの家を過ぎ越すようにされました。大きな悲しみがエジプト中を覆ったのを見て、ファラオは、「これ以上イスラエル人がいて災いが続くとはエジプトは滅びてしまう」と思い、イスラエル人が出て行くのを許したのです。

イスラエルの人々は、モーセを先頭に、昼は雲の柱、夜は火の柱に導かれながら進んでいきます。しかし、その頃エジプトでは働き人である奴隷がいなくなったのを後悔し、ファラオは「イスラエル人を連れ戻せ」と命じ、大勢の軍隊を仕立て、自ら先頭に立ち出発しました。

イスラエルの人々は荒れ野をさまよいながら進んでいましたが、ちょうどその頃、海辺でキャンプを張っていました。そのうちの誰かが「あの音は何だ?」「地響きのような音がするぞ」と気づき、お互い顔を見合わせていると、「エジプト人だ、エジプトの軍隊が押し寄せてくるぞ」という声が聞こえ、見ると大勢のエジプト軍がどんどん近づいてくるのが見えます。

何ということでしょう、後ろからはエジプト軍が迫ってくるし、目の前は海です。「どうしよう、どうしよう!」。中にはモーセにくっついてかかる者が大勢いました。「どうして我々をこんなところへ連れてきたのだ」、「こんな荒れ野で死ぬくらいなら、エジプトで奴隷だった方がよかった」。口々

に勝手なことを言います。

しかし、モーセは、「恐れてはならない。落ち着いて、今日、あなたたちのために行われる主の救いを見なさい」、「静かにしていなさい」と命じました。

そうしている間にも、後ろからはエジプトの軍隊がどんどん迫ってきます。すると、突然、イスラエルの民の先頭に立っていた雲の柱が後ろに回り、軍隊との間に割って入りました。軍隊は思うように前に進めません。モーセは主に命じられたように海に向かって手を上げました。するとどうでしょう、激しい東風が吹き、その風に海の水が押し返されて、海が二つに分かれて道ができました。驚いている暇もありません。イスラエルの人々はモーセを先頭に乾いた海を渡り始め、全員が無事に向こう岸にたどり着きました。そして今度は、それを見ていたエジプトの軍隊が渡ろうとしたとき、再びモーセが海に向かって手を上げると、左右に分かれていた海が元のように戻りました。エジプトの軍隊は一人残らず水に飲み込まれ、夜が明けると元の穏やかな海に戻っていました。

海を目の前にしてエジプトの軍隊に追い詰められたとき、誰が海の中を渡って逃げることができると想像したことでしょう。でも、神さまはそれをしてくださったのです。

イスラエルの人々は、軍隊に追い詰められたときモーセに文句を言うのではなく、その先にいらっしゃる神さまに信頼すべきだったのですよね。

**〈お祈り〉**

天の父なる神さま、神さまにはおできにならないことはありません。どのようなときにも、神さまのお力を信じ、神さまに心から従っていくことができますようお導きください。イエスさまのお名前によってお祈りいたします。アーメン。

**〈ねらい〉**

神様の力強い導きを信頼して従う。

**〈はじめに〉**

秋を迎えました。これからクリスマスに向かって、日曜学校行事の計画・具体的な準備も始まるのでしょうか。私たち分級の奉仕者は、子どもたちを教え、導き、クラスをまとめ、チャレンジを与え、また子どもたちとの信頼ある関係を築きあげることを通して、子どもたち一人一人の信仰の成長のためにこの働きにつかせていただいています。短い時間の中にあっても尊い働きです。

**〈御言葉に聴きましょう〉**

- ①エジプトの王様の名前は何か。
- ②イスラエルの人々がみんないなくなった後、ファラオ王様は、どうしましたか。(8節)
- ③後ろから追いかけて来たエジプト軍を見て、イスラエルの人々はどう思いましたか。(10節)
- ④怖がったイスラエルの人々に、モーセさんは何と言いましたか。(13、14節)

**〈展開例〉**

イスラエルの人々は、長いエジプトでの奴隷の生活から抜け出すことができました。モーセさんと一緒に、長い長い旅を続けました。昼は雲の柱、夜は火の柱が、長い行列の先頭にあって、イスラエルの人たちは、道に迷うことなく、前にどんどんと進んで行くことができました。神様がそのように導いて、みんなを守ってくださったのですね。でも、大変な事が起きたのです。エジプトのファ

ラオ王様の心が変わったのです。神様から何度も恐ろしいわざわいにあい、やっとやっと、奴隷を解放したことも忘れて、また、あの奴隷たちを自分のものにしたくなって、追いかけることにしたのです。たくさんのお戦車、馬、兵隊を連れて追いかけてきたのです。

それを知った、イスラエルの人たちは、あまりの恐ろしさのため、これまで、神様がエジプトを連れ出してくださって、守ってくださっている神様のことをすっかり忘れて、モーセさんに文句を言い始めました。ついにイスラエルの人たちの目の前には海、後ろには捕まえに来たエジプトの兵隊たち。もう駄目だ、つかまってしまおう、またあの奴隷の苦しい生活に戻されてしまおう、と誰もが目の前まっくらな思いになった時、モーセさんは、みんなに「怖がってはいけません、静かにしなさい」と言われました。そして神様はモーセさんに「あなたの杖を高く挙げ、手を海に向かって差し伸べ、海を二つに分けなさい。そして進んで行きなさい」と言われました。モーセさんがその通りにすると、海の水が二つに分かれ、道が出来て、みんなはその道を通って、向こう岸に渡ることができました。後から追ってきたエジプト軍はみんな水の中に沈んでしまいました。イスラエルの人々は、神様に守られて助かったのです。

みんなはどんなにうれしかったでしょう。神様の「力」をどんなに知ることができたでしょう。今まで文句をモーセさんに言ったことをどんなに反省したでしょう。イスラエルの人々は、神様を恐れ、神様とモーセさんを信じました。

**〈お祈り〉**

神様、私たちのあなたに対する信頼が、ますます豊かに、大きく成長しますよう、お導きください。アーメン。



## 〈ねらい〉

絶体絶命の危機にも、神さまは共におられることを学ぶ。それがたとえ重大事件のときだとしても、「主が私のために戦われるのだ、心静かに主を待ち望もう」と、みことばによる励ましによって主により頼む者となりたい。

## 〈ワーク〉

【5節】 ファラオはイスラエル人たちが出かけた後どう思っていましたか？

A：イヤなやつらがいなくなって嬉しい

B：仕事をする人がいなくなって困った

【8節】 そこでファラオはどうしたのでしょうか？

A：追いかけた

B：自分が働くことにした

【9～12節】 どうとうエジプト軍はイスラエルの人々の近くまで追いついてしまいました。イスラエルの人たちはどうしましたか？

A：迎えに来てくれたので帰ろうとした

B：恐ろしくなって大騒ぎになった

【14節】 モーセはイスラエルの民に何と言いましたか？

「主が□□□□□のために戦われる。あなたたちは□□□□□していなさい。」

……それは、恐れたり不安になったりする必要がないからなんだよ。だって、神さまが戦ってくださるから。神さまは今も私たちに同じように約束してくださってるんだよ。

【21～22節】 イスラエルの民たちの後ろにはエジプト軍がいて、目の前には□があったので、彼らは前に進むことができなくなりました。で

も、モーセが手を海に向かって差し伸べるとどうなりましたか？

( )

【23～28節】 追いかけてきたエジプト軍はどうなりましたか？

( )

## 〈祈り〉

私たちが造ってくださった神さま。あなたの尊いお名前を賛美します。私たちは困ったことがあると、誰かに文句を言いたくなったり誰かのせいにしたくなったり、ああすればよかったこうすればよかったと、大騒ぎをしてしまいます。でも神さまは「静かにしていなさい」とおっしゃいます。私たちのために戦ってくださる、という神さまからの約束を私も忘れないようにさせてください。あなたにおゆだねします。

## 〈答え（例）〉

【5節】 B

【8節】 A

【9～12節】 B

【14節】

「主があなたたちのために戦われる。あなたたちは静かにしていなさい」

【21～22節】

海（海は乾いた地に変わり、水は分かれ、水は彼らの右と左に壁のようになった）

【23～28節】

死んでしまった、海に飲み込まれた、など。



## 〈ねらい〉

神様は、力強い勝利によって御自身を信じさせてくださる方であることを感謝する。

## 〈展開例〉

①先週皆は、神様は皆に御自分を信じさせてくださる方であることを学んだ。今週も、神様とはみんなの中に、御自分を信じる心をつくり上げてくださる方であることを学びたい。「また、同じ話か！」なんて思うかもしれないが、これは何回繰り返してでも皆に覚えてもらいたいこと。先生が思うんじゃない。神様が皆にそう思っておられる。大切なことだから、神様は何度も何度も「私はお前の中に信じる心をつくるのだ」ということを聖書から語られる。

②今日の話で、まず注目したいのはイスラエルの人の心。先週の話で、イスラエルの人達はエジプトに起こされる災害から何度も守られたことを聞いた。彼らの心は「あぁ、神様は私達を守ってくださる方だなあ」こんな信頼が生まれたはず。でも、今日の箇所でエジプト軍が自分達に向かって来たとき彼らの心は神様を頼ることを見失ってしまう。

Q. 皆も似たようなところがないだろうか？「神様は自分を守ってくれているような気がするなあ」こんなことを感じながらも、この先が不安になるような問題、神様に従うことが難しく思える事態が起こると「神様を信じてるのに、なんでこんな目にあうんだ！ こんなんだったら教会になんか行かないほうがまし。神様を信じない人達と同じ毎日のほうがましだ！」こんな風に思うことがあるかもしれない。また、人によっては困ったことがあっても神様に頼ってお祈りするということが、頭に浮かびずらしい人もいることだろう。イスラエルの人達はま

さにそのような心境だった。

③神様からイスラエルの人を奪い返そうとするエジプト軍。神様に不信感をもって、神様の力を軽んじるエジプトへ戻ろうとするイスラエル人。その両方に、この世界を支配している御自分の圧倒的な力を示された。神様がここで奮われた力とは、御自分の愛する民に押し迫る脅威を減らす力。また、御自分の愛する民を安全なところへと導く力だった。神様はエジプトという本当の神様を知らない人々からイスラエルの人々を勝ち取られた。イスラエルはこれからエジプトの造りモノの神ではなく、生きていて自分達のために戦ってくださる本当の神様と一緒に生きていく。神様はイスラエルの人々の新しい人生の始まりに「私と一緒に生きていくことを不安がる必要はない！ お前達を幸せな日々へと導く私を疑う必要はない！ 愛するお前達を私から奪える者などいないのだから！ 私はお前達を嫌な目に合わせる者ではない！ 嫌な思いから救う者である」このことを示された。

④今日の話で、「エジプト軍」とはどんな勢力だっただろう？ それは「神様から神様の民を奪おうとする勢力」である。聖書は、神様と人を引き離す力を「罪」と呼ぶ。皆もこの罪の力にふらつくことがあると思う。しかし、皆が教会にきて礼拝している神様、そしてその御子イエス様は、愛する者達を罪の勢力から勝ち取ってくださる御方である。皆の一週間が、神様の勝利が広がることを味わうときなるように祈りたい。

## 〈祈り〉

私達のために罪の勢力と戦い勝利されるあなたのすばらしさに感謝します。アーメン。